

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第4回
 第2章 前川康男先生と今西祐行先生
 その1 『ヤン』

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生だが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002年）だろう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第16号（1966年5月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004年）は、母の担任ということになる。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会があった。

わが家の戸棚 『びわの実学校』創刊号は欠号

前回も書いたが、『びわの実学校』は、母の手で10号ずつ紐でくくられて、家の戸棚のなかにある。ただし、創刊号（1963年10月）は、全ページのコピーを製本したものだ。母は、毎月1回1年間かよい、そこで坪田先生に出会った「子どもをめぐる文化教室」（第1回参照）を受講中に第2号（63年12月）から購読するようになったと思われる。わが家の『びわの実学校』の原本の所蔵は第2号から終刊号（第134号、86年4月）までで、創刊号は、欠号である。

『びわの実学校』創刊号は復刻版があり、これは、わが家の戸棚にもある。製本されたコピーはモノクロだから、この復刻版で内容を見ていくことにする。葉をしげらせている樹の表紙は、山高登さんの版画だ。表紙にも奥付にも、「創刊1号」と記されている。

巻頭は、坪田譲治「雑誌を思いたった話」。そして、短編童話が7編掲載されている。庄野英二「水の上のカンボン」、岡野薫子「白い蝶」、松谷みよ子「モモちゃん動物園へ行く」、宮口しづえ「早春」、椋鳩十「やまのこども」、与田準一「アリの思いで」、佐藤暁「四角い虫のはなし」。詩は、佐藤義美「みんなの星」、野長瀬正夫「老人と子ども」の2編だ。

子どもの作文や詩、坪田きね子さんの「びわのみ文庫の三年間」という報告ものっている。坪田先生のお宅の家庭文庫「びわのみ文庫」が『びわの実学校』の発行所だった。（注1）文庫を実際に切り盛りしていたのは、ご長男の正男さん、きね子さんご夫妻である。母は、きね子さんにお願ひして、この創刊号を貸していただいて、コピーしたのかもしれない。

巻末に8ページにわたって掲載されているのが、前川康男「ヤン 連載童話・1」だ。「一、ラン河のほとり」は、「ラン河は、中国大陸の北を流れる大きな河です。」と書きはじめられる。その河のほとりの道をとぼとぼ歩いているのがヤンで、ヤンは、いなくなった兄をたずねて、カイラン炭坑まで行こうとしている。この連載は、11回までつづくことになる。

「ヤン」は、前川先生の中国での戦争体験から生まれた作品だ。前川先生も今西先生も、1943（昭和20）年12月に、早稲田大学に学籍を置いたまま、「学徒出陣」をしたのだった。

坪田先生の編集後記のなかの前川先生

創刊号の奥付のそばに「編集日記」のコーナーが設けられ、編集委員の何人かが、それぞれイニシャルの署名で短い文章を寄せている。「編集室だより」「編集室から」といったタイトルに変わりながら、このスタイルがつづけられたが、第15号(1966年2月)の「編集室から」は、坪田先生がひとりで執筆している。「編集後記なんでものを書くのは、実は生れて初めてです。だからどう書いていいのか。どんなことを書いたらいいのかよくわかりません。考えた末、編集者が読者へあてて書いた手紙と思って書く事にしました。」——これが書き出しで、おしまいには(一九六六・二・四 ツボタ)の署名がある。つぎの号からも、このかたちがつづく。以下は、第37号(69年10月)の坪田先生の2ページにわたる「あとがき」の一節だ。

前川康男氏は、七八年前は週刊新潮の編集部にて、そこの幹部でした。それが創作を志して、退職したのですが、今は、この「びわの実学校」の編集長です。こういふと、前川君は、おかしさをこらえて、かえってむつかしい表情になります。素より編集長といってもこの雑誌から月給なんか全然出ていません。出ない上に、この人は、創刊号から二年にわたって長編「ヤン」を書きました。これはその重厚さにおいてかつてない傑作で、いくつもの児童文学賞を受けました。(中略)私とは(前川先生の一宮川注)学生時代以来、三十年からになるつきあいなので、(編集長を一宮川注)ことわる訳にもいかないらしく、冗談ながら、私は同情しているわけでありませう。

前川先生は、1939(昭和14)年、早稲田大学の第一高等学院に入学して、「早大童話会」に入る。会の顧問だった坪田先生のお宅にも、たびたびうかがう。

さて、「ヤン」は、連載が終了しても、前川先生が推敲を重ねたものだから、なかなか本にならなかった。坪田先生は、編集後記で何度もやきもき心配している(第17号、第20号)。そして、いよいよ単行本の刊行だ。第25号(67年10月)の「あとがき」から引く。

びわの実学校では、二百枚くらいの作品だったものを、彼は全部新しく書き直し、それが何と四百何十枚になりました。それに費やした日時は、二年にも及びました。しかしその「ヤン」は、雑誌の上でもわれわれの誇りでしたが、一層の力と重み加わり、彼畢生の力作となりました。そして、この九月に、いよいよ実業之日本社から刊行されました。

坪田先生は、つづけて、「私はその本を手にとって、彼がこの一作にこめた熱意と努力を思うごとに、何となく厳肅な気になり、彼のために何か祈りたいような感じになりました。とにかくこれは大作であり傑作です。」とも述べている。

連載「ヤン」と単行本『ヤン』

1967(昭和42)年9月、創作少年少女小説『ヤン』が出版された。『びわの実学

校』の連載が終了した1965（昭和40）年6月から、2年あまりたった。挿絵は、連載のときと同じ久米宏一。連載の大はばな増補や改訂があり、固有名詞やその表記などにも変更がある。（注2）単行本『ヤン』は、全4部の構成になっている。連載の「ヤン」の内容は、このうち、第3部全部（第1章～第4章）と第4部の第1章にあたる。単行本には「まえがき」がある。

これから、お話するのは、一九四四年（昭和十九年）の春から、一九四五年の夏にかけての、揚子江のほとりにいたヤンという少年の物語です。

日本と中国の、八年にもわたる、ながい悲惨なたたかい。その戦争のさなか、揚子江の川べりには、戦争にいためつけられた子どもたちが、どろだらけになってあそんでいました。学校へいっていない子、父や母をうしなった子もいました。

フォン・ヤンも、その中のひとりです。

（以下略）

（カッコ内原文）

つづく第1部「揚子江の星」（全2章）は、「フォン・ヤンの話をする前に、揚子江のほとりのこと、私がいた浦口（プーコウ）という町のことを、ちょっとお話することにしましょう。」（カッコ内原文）とはじまり、物語の語り手である「私」が登場する。見習士官だった「私」は、ヤンとの出会いを語る。

「私」が北のほうの戦線から浦口の高射砲陣地へ異動したのは、1944（昭和19）年の8月だった。揚子江の日本軍の輸送路を守るための陣地だが、アメリカの爆撃機が、甲板に貨車をのせて浦口と対岸の南京を往復する航送船の棧橋をねらってくる。1945（昭和20）年の6月ごろ、アメリカの夜間爆撃が急に的確になってきた。だれかが地上から灯りで合図を送っているらしい。「私」たちは、数日も搜索をつづけて、とうとう地上連絡員を追いつめる。がけから落ちて、けがをしたのをとらえてみると、それは子どもで、ヤンだった。近くに、携帯用のランプもあったのだ。

「私」は、この陣地に来て間もなく、ヤンに会っていた。陣地から少しはなれた草原で野犬に追いかけていたのを助けてくれたのだ。揚子江でつりをしていたヤンからウナギをもらったこともあった。「私」は、ヤンに、日本でわかれたきりの弟のすがたを重ねていた。どうして、そのヤンが、危険な地上連絡員になったのか。中隊長は、「私」にヤンを射殺する前に取り調べろとせまる。

「ぼくをおぼえているかい？」——ヤンはうなずく。ヤンが「私」に返事をするようになったのは、つかまって3日後だった。ヤンは、「私」にこんなこともいった。——「なぜ、日本、戦争するの？」

十日ほどたちました。

ヤンは、私にいままでのことを、くわしく話してくれました。中国語と日本語のチャンポン会話で。

ヤンは、自分がやってきた、たどってきたさまじまなことを、私に話し、もし

できたら、かれの兄や、いとこ友だち、そういう人たちのだれかに、私から話してもらいたいと考えたのかもしれませんが。うたれることをかくごして、私からつたえてもらいたいとおもったのかもしれませんが。

ヤン三等兵

「これから、お話するのは、私がきいたヤンの話、一九四四年の春から、一九四五年の夏にかけての、揚子江のほとりにいたヤンの話なのです。(以下略)」として、第1部はおわる。

第2部「長江（ツァンチャン）のヤン」（カッコ内はルビ、全3章）も、単行本で書きくわえられたものだ。戦争で父母を亡くしたヤンは、兄とともに苦力（クーリー）頭の叔父の家で暮らしていた。ある朝、突然、兄が「にいさんには、仕事があるんだ。どうしてもいかにくちやならないんだ。」といって家を出て、戦争のなかに飛び込んでいく。叔父は、「あいつは、八路軍（中国共産軍）にはいったのだろう。華北の山岳部に、たてこもっている八路軍に。もう帰れないだろうな。」（カッコ内原文）という。やがて、兄が北の果てのカイロワン炭鉱にいるという、うわさが聞こえてくる。ヤンは、家を抜け出し、貨車にもぐりこんで、北へ行く。

第2部では、野犬におそわれた「私」がヤンに助けられたり、ヤンから大きなウナギをもらったりしたことも、ヤンの視点から語り直されている。

第3部「ヤンのながい旅」（全4章）と第4部「南十字星のひとつの星」（全2章）の第1章が『びわの実学校』に連載された内容だ。

貨車の旅の5日目、どこかの駅に止まったとたん、ヤンのかくれていた貨車のとびらが開き、駅員が荷物をしらべに入ってくる。ヤンは、あわてて飛び出して、夢中で走る。しばらく駅員が追いかけてきたが、逃げ切って、小さな集落にたどり着く。そこは、カイロワン炭鉱まで40キロほどの集落だった。農家の馬小屋にねかせてもらい、また、朝早く出発した。遊牧民のパオに泊めてもらったり、若い中国人が運転するトラックにのせてもらったが、それが日本軍に野菜をとどけるトラックだと知って飛び降りたりしながら、何とか炭鉱町まで来た。

炭鉱町では、兄の仲間たちには会えたが、兄には会えない。カイロワン炭鉱は、日本が接收していて、日本軍の陣地があった。兄は、日本軍にとらえられて、とじこめられているらしい。じっとしていられなくて、陣地の近くまで行ったヤンも、日本の兵隊たちにつかまって、陣地で働かせられることになる。兵隊たちの入る大きな風呂の風呂たきなどの雑用だ。ぼろぼろの軍服を着せられ、「ヤン三等兵」と呼ばれる。兄を追いかけてきたヤンもまた、戦争に飛び込んだのだ。

前川康男は、『びわの実学校』の連載で、ここを書いた。カイロワンに行き、また浦口へ戻ってくるまでのヤンの7か月にわたる旅を書いたのだ。ここが物語の中心部である。岡山の「大手まんぢゅう」（第2回参照）を思い出しているなら、いわば、おまんじゅうの餡にあたる部分だ。連載終了後の2年あまりは、この餡をどのような生地（皮）につつんで読者にわたすのかを考え、1個のおまんじゅうを作り上げる期間だったのだろう。

前川康男自筆年譜より

講談社文庫版『ヤン』（前掲）や、『現代児童文学作家対談4 今西祐行・大石真・前川康男』（インタビューア・神宮輝夫、偕成社 1988 年）には、前川先生の自筆年譜が掲載されている。1945（昭和 20）年には、つぎのように書かれている。引用は、『作家対談』による。

一九四五年〔昭和 20 年〕二四歳

北京、カイロワン炭鉱、南京、浦口など、敗戦近い数か月を転々、上海市郊外古澄郷南村で天皇の降伏宣言を聞く。カイロワン炭鉱で中国少年に出会う。守備隊の雑役をする一〇歳くらいの片目の少年で、米軍機の爆弾で両親を失ったと知り、少年を主人公に戦争の物語を書きたいと思った。敗戦の日、余分の衣類と、日本から持参した小川未明の童話集『赤い蠟燭と人魚』（富山房百科文庫）を焼く。上海市江湾鎮の収容所に抑留される。コレラで戦友を失う。（カッコ内原文）

カイロワン炭鉱で出会った中国の少年を主人公に戦争の物語を書きたいと思ったと記されているが、これが、まさに『ヤン』のモチーフだ。それなら、私たちは、連載「ヤン」から単行本『ヤン』への道すじをたどるだけではなく、敗戦のときの前川康男に立ち戻らなければならない。いや、まず、出征のときの前川康男に想像力をのばさなければならないだろう。（つづく）

（注）

- 1、坪田先生の自費で創刊され、刊行された『びわの実学校』は、第 66 号（1974 年 11 月）からは、講談社が制作費を負担するようになり、発売元になった。
- 2、『ヤン』は、講談社文庫版（1976 年、風間完絵）、新装版（理論社、大長編シリーズ、1987 年、おぼまこと絵）もある。